

西国第二十七番 書寫山

御本尊／六臂如意輪觀世音菩薩 開基／性空上人

天台宗 圓教寺

慈悲の道

第四百十一世長吏 大樹玄承

私たち、僧俗に関わらず日本人は佛教の神髓のなんたるかを既に知っている。それが何であるかに気づかずとも。それは私たちの生き方にも生活のありようにも、たずまいの中に佛教はちりばめられている。何世代にもわたり繰り返されてきて、それをもって親に育てられた身体の奥底に染みこんでいる。だからこそそれはすでに佛教とは言えないほど、私たちのものになっている。

昔中国に、いつも樹上で坐禅瞑想していた圓修禪師に白樂天がその樹下を通って、「佛教には何が教

言を『七佛通戒偈（しちぶつつうかいげ）』と言います。七佛とは釋尊以前に出現した七人の佛のことを指します。それらは毘婆尸佛、尸棄佛、毘舍浮佛、拘留孫佛、拘那含牟尼佛、迦葉佛、釋迦牟尼佛です。これらの佛陀が戒めとして共通して受持し、説いたのがこの偈戒で、そのことから佛教の神髓、

求めるところはここにあり、七佛通戒偈として現在も佛教徒に誦誦されています。宗派、教団、いずれにおいてもこれを説かないものは佛教とはいえません。その意味は「もろもろの悪を作すこと莫く（なく）もろもろの善を行い 自ら其の意（こころ）を淨くす 是がもろもろの佛の教えなり」です。善だと知りながらも善が行なえず、悪だと知りながら悪を止められないと言わけてです。我々の悲しい現実が体験を通して知らされていくこともこのやりとりはあらわしています。また釋迦の教え、佛教を一貫するものは、因果の道理「善因善果 悪因悪果 自因自果」です。それは三世十方を貫く（いつでもどこでも変わらない）真理であると説くのが佛教です。

簡単に言ってしまうえば「悪いことはしないでいよう、良いことをやろう」と言うことなのです。白樂天のように「誰でも知っている

よ」と思われるでしょう。知っていて当然です。

風土や日本人の生活習慣に基づき、自然に生じた神觀念を元にした神道の要素がそもそも日本にはあり、そこに伝来した佛教を中心に儒教や道教などの教えも取り込んだものが日本人の宗教観となりました。爾来この教えが千年を超え、どの時代においても我々は希望の象徴である子や孫に幾数代にわたり伝えてきました。もはやそれは七佛の教えとは認識されず、我々日本人の生活規範になっています。

